

AIによる管理会計の進化と変革

谷 守 正 行 CMA

目 次

- | | |
|---------------|---------------------|
| 1. はじめに | 4. 管理会計へのAI適用の効果と課題 |
| 2. 管理会計の体系と機能 | 5. おわりに |
| 3. 管理会計へのAI適用 | |

AIと管理会計の関係性に焦点を当て、AIの適用が管理会計の進化と革新にどのように貢献できるのかについて探求する。管理会計体系に基づいてAIが管理会計にもたらす効果と課題を理論と実務の両面から研究して明らかにする。AIは管理会計を進化させ、マネジメントを変革する可能性がある。本稿を通じてAIと管理会計やマネジメントの関係性を深く理解し、経営者や管理会計担当者がAIを戦略的かつ効果的に活用するための指針を提供する。

1. はじめに

今、IoT (Internet of Things)、AI (Artificial Intelligence) およびWeb3の進展によって第4次産業革命が起ころうとしている。というより、OpenAI社のChatGPT (生成AI) の実用性をみる限り、第4次産業革命まっただ中と言わざるを得ない。産業が変革すれば、当然ながらマネジメントやそのための会計である管理会計は変わる。特に、業務的意思決定に相当する自動運転が大きく

進化したように、第4次産業革命の中心にあるAIは管理会計やマネジメントを大きく変革させるものと予想される。

ところが、企業実務の経営管理や管理会計をみる限り、いまだに伝統的なマネジメントが職人芸的 (属人的) に維持されていることが少なくない。過去のまま変わらず伝統を守っているという点では、管理会計研究の面でも同様である。例えば、半世紀以上前からある伝統的原価計算や30年以上前からあるABC (Activity-Based Costing) や



谷守 正行 (たにもり まさゆき)

専修大学 商学部 教授 (専門 管理会計)。博士 (経営学)。日本管理会計学会常務理事、日本原価計算研究学会理事。1984年九州大学工学部卒業。三井銀行・さくら銀行 (現三井住友銀行)、NTTデータ、りそなホールディングス、PwCあらた有限責任監査法人を経て、2014年より現職。主な著書に『サブスクリプションの収益管理と企業価値評価』(金融財政事情研究会、2022年、編著)、『地域金融機関の経営・収益管理—銀行管理会計のケーススタディー』(中央経済社、2019年、編著)、『金融機関のためのマネジメント・アカウンティング—IFRSとRAFによる統合リスク管理の進化—』(同文館出版、2018年、共著)等。